

校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

非認知能力の重要性

「非認知能力」とは2000年にノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・ヘックマン教授が「人生の幸せと成功に学力よりも大きく寄与する能力」と証明した能力のことです。問題解決力、柔軟性、心の回復力、自制心、やり抜く力、社会性、共感力など、従来の「学力」とは異なる「生きる力」として、今回の学習指導要領改訂でも重要視されるようになりました。IQ やテスト結果のような数値化される「認知能力」と対比されることがありますが、これからの社会を生きていくためには、そのどちらかが大事なのではなくて“両方”を兼ね備えることが必要になってきます。全米最優秀女子高生コンテストで優勝した娘をもつボーク重子さんがその力の重要性について述べたインタビュー記事を紹介します。

子どもは、自分にとって何が大事か、自分が何をやりたいかをわかっています。ただ、それをダメにしてしまうドリームキラーが、実は身近にいます。それは親なのです。「無理だからやめなさい」「あの子はできるのにどうしてできないの?」「〇〇ちゃんはどこの高校行ったの?」「男の子なんだから…」そんなふうに無意識のうちに比較したり考えを押しつけたりしてしまうのも親です。子どもは誰かと比較されると自分の存在価値に自信をもてなくなってしまいますし、自己肯定感も下がり、気付いていないうちに子どものパッションを摘み取ってしまっているかもしれません。

「頭がいいんだから医者になりなさい、医者になれば幸せよ」という決めつけも罪です。子どもは親の期待に応えよう、親の気持ちを優先させようとして苦しんでしまいます。子どもの心を自由にするためにも、親の思い込みを押しつけないことです。そして、子どもの個性が何であれ、それをあるがままに受け入れることです。子どもの幸せを願うあまりに、ドリームキラーになっていないか、たまには我が身を振り返ってみることも大切です。

思春期には、親に対して否定的なことを言うこともあります。そこは感情で応じるのではなく、ぐっと我慢です。思春期の子どもにとって、吐き出せる場所があるかないかはとても重要で、吐き出しても大丈夫という安心感があるからこそ、親にぶつかることもできるのです。子どもと言いつつ後悔するくらいなら、“ここなら安心して吐き出せる、そう娘から信頼されているんだ”、とポジティブに考えるようにしていました。

「非認知能力を育てたい」と思いながらも、親はどうしても目先の学力や偏差値が気になります。しかし、非認知能力が高ければ、勉強の分野においても自分が何をすべきかを理解したうえで行動することができるはず。ゲームをするにはまず宿題をやってしまおうといった計画性や自制心、苦手な教科や難しい問題に挑もうとする粘り強さ、やり抜く力をもつ子どもたちに、学力がともなわないはずがありません。さらに、高校受験を控えて、寝る間も惜しんで勉強している子どもにこそ、非認知能力はものすごい支えになります。塾によっては点数でレベルを振り分けられたり、自分の評価が点数によって決まったりすることもあるでしょう。「こんなに頑張ったのに低いクラスになってしまった」「小学校までトップだったのに、中学で成績が落ちてしまった」といった壁が立ち上がったときに、非認知能力が育っていない子はそこでポキッと心が折れてしまうのです。でも非認知能力が育っていれば、自分という人間はそんな点数で語れるほど小さい存在ではないということがわかっている。「自分の頭が悪いんじゃない、周りに頭のいい人がいっぱいいるんだからこういうこともあるよ」と寛容になったうえで、じゃあ自分の目指すレベルになるにはどうすればいいのかを客観的に分析して、自分に厳しくなれる。非認知能力に裏打ちされた自己肯定感や自信があるからこそ、壁に立ち向かい、自ら立ち上がることができるのです。

特に受験生の親は成績や偏差値の上下に一喜一憂してしまいがちですが、親以上に子ども自身が一番不安や危機感を感じているのです。だからこそ家庭は、子どもが安心して落ち込める場所であってほしい。安心して落ち込んで、吐き出して「じゃあ次はどうしよう」と前を向ける場所であってほしい。家庭の雰囲気張り詰めてしまいそうなときこそ、家庭を安心して満たしてほしいと心から願っています。